

絡新婦の理

じよろうぐも

ことわり

N. D. C. 913 830p 18cm

絡新婦の理 じよろうぐも り

一九九六年十一月五日 第一刷発行 一九九六年十二月二五日 第二刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者—京極夏彦 きょうごく なつひこ

© NATSUHIKO KYOGOKU 1996 Printed in Japan

発行者—野間佐和子



発行所—株式会社講談社

定価 一、五〇〇円

東京都文京区音羽二―二二―二 郵便番号 一―二一―〇一 編集部 〇三―五三九五―三三〇六

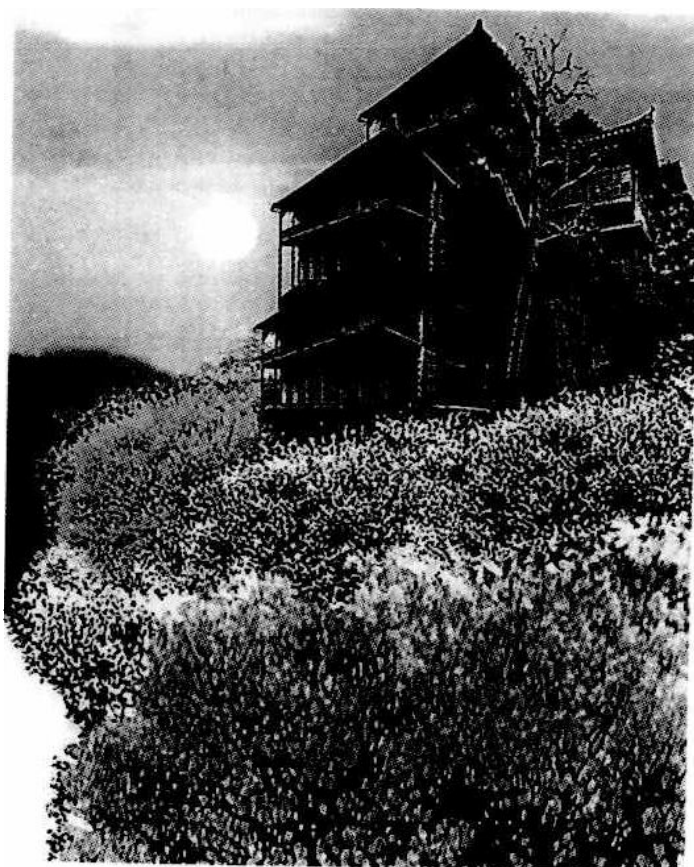
販売部 〇三―五三九五―三六二六

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所—廣済堂印刷株式会社 製本所—和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-181932-1 (文三)



せをはやみ岩にせかるゝ瀧川の、
思ふ男は——おまへならでは。

絡新婦の理
じよろうぐも
ことわり

極夏彦

ODANSHA NOVELS
講談社
ノベルス

ブックデザイン 熊谷博人
カバーデザイン 辰巳四郎



絡新婦（じょろうぐも）

じょろうぐも
絡新婦

画図百鬼夜行前篇
陽

足高蜘蛛の変化の事――

ある山里に住みける者、いと静かなる夕月夜ゆうづきよに慰みに出でたるに、大きな栗の木くりの又またに、六十ばかりなる女、鉄漿かねをつけ、髪のかすかに見えたるを四方に乱し、彼の男を見てけしからず笑ふ。

男肝を消し、家に帰りて後少しまどろみけるに、前さきに見えける女現うつのやうに遮りさへぎける故、心凄くて起きもせず寝もせてゐたる所に、月影に映るふ者あり。

昼見つる女の姿、髪かみの乱れたる体てい少しも変はらず、恐ろしさ比ひひなくて、刀を抜きかけて、いかさま内に入りなば斬らんずるものと、思ひ設けてゐたる所に、明り障子をあけて内に入りぬ。男、刀を抜き、胴中どうなかをかけて切つて落したり。

化け物、斬られて弱るかと思えしが、男も一ひと刀切きつて心を取り失ひける時、やといふ声に驚き、各おのおの出で合ひ見るに、男死に入りてぞ居たりける。漸やうやう氣をつけられ、旧もとの如くになりけり。化け物と覺

しきものは無かりしが、大なる蜘蛛くもの足ぞ切り散らしてぞ侍る。かかる物も、星霜ふ経れば化け侍るものとぞ。

＊

急なるときも思案あるべき事――

(略)やや宵もたけなほ闌はにして、四更の空と覺しき此こゝろ、十じゅう九く二十はたちばかりの女房、孩子こいしを抱きて忽然と来たる。かかる人家も遠とほき所へ、女性にょしやうとして、夜更けて来べきにあらず。如何様いかさまにも化生けしやうの物にこそと、後ろめたく用心して侍りしに、女うち笑みて、抱きたる子に、あれなるは父にてましますぞ。行きて抱かれよとて突き出す。此の子、するすると来るに、刀に手をかけてはたと睨にらめば、其の儘歸りて母に取り付く。大事ないぞ、行けとて突き出す。重ねて睨めば又歸る。かくする事四、五度にして、退屈くたんやしけん。いてさらば、自ら参らんとて件の女房、会釈もなく

来たるを、臆せずも抜き打ちにちやうど切れば、あと云ひて、壁を伝ひ天井へ上がる。明け行く東雲しらみ渡れば、壁にあらはな貫を踏み、桁など伝ひ、天井を見るに、爪さき長き事、二尺ばかりの上臈蛛、頭より背中まで切りつけられて、死したり。人の死骸有りて、天井も狭し。ああ誰が形見ぞや。又連れし子と見えしは、五輪の古りしなり。凡そ思ふに、化け物と思ひ氣を逼きつつも、五輪を切らば、莫耶が剣も或は折れ、或は刃もこぼれなん。(略)

宿直草卷の二

*

孫六女郎蜘蛛にたぶらかされし事

(略)そよ吹く風に睡眠の催しけるに、何国より来たりけん、年の此五十斗なる女、身には五色の衣裳を著し、孫六が前に来たる。孫六あやしく思ひ、いかなる人ぞと尋ねければ、老女のいはく、我は此あ

たりに住む者なり。御身常々此処に來たりて、四季おり／＼の詠めも無下ならず、殊更今の御口ずさみを聞きまいらせ、一人の我が娘、御身をふかくおもひ焦れ侍るなり。子をおもふ親のならひ、あまり不便に候へば、情けをかけてやり給へ。いざわが住む方に伴ひ参らせん。いざ、せ給へといふに、孫六も怪しながら、心そゞろに伴ひ行けば、大きな楼門に至りぬ。(略)十六七斗なるさも美しき女の、身には錦の羅に五色に織りたる綾をまとひ、髪はながくて膝をたれ、いとたをやかに只一人歩み來たる。(略)兎角御身にはなれずとすがり付けば、孫六今もて扱ひ、あなた此方と逃げるとおもへば、有し家形は消へうせて、元の竹縁にてありければ、(略)ちいさき女郎蜘蛛そこらを静かに歩みゆきぬ。上の方を見やれば、軒には数多の蛛ども、さまざまに巢をくみて歴然たり。(略)扱は此蛛我が仮寝の夢中に、女と化し、われをたぶらかしけるならん。

太平百物語卷の四

「あなたが——蜘蛛だったのですね」

低い、落ち着いた声だった。

一面の桜である。

満開の桜の只中である。

春の海を渡る綿津見の猛き息吹が断崖を駆け上り
儚き現世の栄華を一瞬にして薙散らす。空も海も大
地も渾然一体となって、ただただ世界を桜色の一色
に染め上げんとしているかのようである。

その桜の霞の中にひと際黒き影がある。

朽ちかけた墓石。そして——黒衣の男。

対峙するのは桜色に染まった女である。

黒衣の男は努めて無表情を装っているようにも思
えた。ただ、それが場を取り繕うための表層である
のか真に感情の起伏がないことに起因する男の内面
の発露なのか、女にもそこまでは判らなかった。

男は続けた。

「八方に張り巡らされた蜘蛛の巣の、その中心に陣
取っていたのは実はあなただった。捕らわれた蝶は
その綻び傷んだ翅の下に、実は毒毒しくも鮮やかな
八本の長い長い脚を隠し持っていた訳だ——」

女は云う。今更何を仰るのです、事件はもう解決
しています——。男は云う。事件は解決しても、あ
なたの仕掛けは終わっていない——。

「——邪魔者を邪魔者を以て制す。あなたの周囲か
ら、あなたを束縛する者は凡て排除された。しかし
あなたは、これから再び束縛されようとしている。
つまりあなたの計画は終了していないのでしょう」

さあ——女は横を向く。

「あなたは、この次にあなたを束縛する者を排除す
ることで、名実共に、この国の中心に納まることが
出来る訳だ。その先も——あるのですか」

女の顔に髪に、幾枚もの花びらが咲く。

「まさか貴方は——私に、あの憑物落としとやらを仕
掛けようとしていらっしゃるのですか？」

「とんでもない。頼まれもしないのにそんなことはしませんよ。あなたから落とすものなど何もない。そして落とす必要もない」

「そうですね。私は私自身の手で憑物を落としたのです。貴方がするように」

「そうでしょうか——男は瞬きもしない。」

「つまりあなたは、あらゆる制度の呪縛から解き放たれ、個を貫き、己の居場所を獲得するために、この計画を練り上げた——そう仰るのですね」

「そう、居場所が欲しかった——と女は云う。」

「どこにも——どこにも居場所がない——だから己の場所を獲得しよう——そう思ったのです」

「どうせ獲るなら一番善い場所を——ですか」

「人ならば誰でもそう思う。当たり前ですわ」

女は強がる。男は冷徹に見据える。

「そう——それに関してあなたの採用した方法は実に効果的でした。このまま胡乱なる時の彼方に葬り去ってしまうには余りにも見事な仕掛けだった」

お褒めに与りまして恐縮ですわ——女はそう云って微笑に笑った。しかし、乱舞する無数の桜色の小片が女の表情を隠し惑わし、女は泣いているようにも見えた。実際——女は泣いてもいた。

悲しいのも辛いのも、本当だった。それでも——女は笑わねばならなかった。男は云った。

「一年前——毒物を使用しましたね」

「さあどうでしょう」

「二箇月前と、そして一週間前にも」

「ならば、何だと？」

「遣り過ぎ、ですよ」

「三人とも遠からず亡くなる筈の人でした。私は今申しました通り、己の居場所を作っただけ。黙っていては誰も居場所を用意してはくれません」

男は、女に向き直る。

「それでもあなたは遣り過ぎだ。幾ら居場所を獲得するためとは云え、あなたはいたいあなたの後ろに幾つ骸を転がせば気が済むのです」

女は、覺悟を決める。

「随分と殊勝なことを仰いますのね。貴方らしくもない。それとも——それが貴方の本性なのですか。そうは思えませんけれど。私は存じておりますわ。

貴方だって貴方の方法で幾人もの」

「僕は——自分の主義主張や私利私欲のために、それをしてる訳ではありません」

「狡いですね。慥かに貴方は概ね懇願されて、半ば無理矢理に腰を上げさせられる。私が貴方を担ぎ出そうとしたのは、勿論あの相模湖の事件の調書から察した所為もありますわ——」

「久遠寺家の——事件ですか」

「そうです。あの女は貴方に居場所を奪われた。慥かに貴方が動かずとも顛末は変わらなかったでしょう。いいえ、一層悲惨な結末だったかもしれない。だから貴方は彼女を救った——彼女は闇から解き放たれ、結果居場所を失って死んだのです。もしや貴方は不本意だったのではなくって？」

「あなたは僕を誤解しているようだ。その読み方は、あなたに僕の本意など解る訳もない」

「解りますわ。貴方は私と違って人道的でいらっしゃるから。だから貴方は——私には手出しが出来ない。違いますか——」

そんなことはありませんよ——男は笑った。

「そう。僕は先般、ひとつだけ嘘を吐きました」

女は大きな瞳を絞った。男の輪郭が際立った。

「川島喜市は——僕が確保している」

「それがどうしたと云うのでしょうか」

女は男から墓石の黒に目を転じる。

男は女に背を向け桜樹を見上げる。

「慥かにあなたは彼の前で一切違法行為を行っていない。だから、痛くも痒くもない。事実、彼はあなたを摘発するどころか——寧ろ感謝さえしている」

「それは——嬉しいですわね」

「いいのですか」

「構いませんが」

「いいのですか。僕はあなたがいたのと同じように否、更に直接的に彼を操作できる立場にあるのですよ。彼は僕の手の内にある。あなた自身が法的に罰せられるような、或はあなたが社会的に失脚するような虚構を構築し、過去に遡ってそうした環境を造り上げることも可能だと——そう云っています」

「心配はしておりません」

「何故ですか？」

「先程申しました。人道的な貴方は——御自分のその技を、そうした形では絶対に使わないでしょう」

ほう、男は初めて意外そうな顔をした。

「——隠しても解ります。あなたの弱点は——その不本意な人間性にあるのでしょから」

「人間性——ですか」

「近代性——と云い換えても宜しいですわ。貴方の詭弁——貴方の紡ぐ呪文は実に有効です。しかし、貴方は意図的にそれを綻ばせることがある」

女は強い視線を男に向ける。

「そもそも貴方は反近代的な陰陽師。私同様中世の闇の末裔ではありませんか。それでいて近代主義者でもあると云うのは得心が行きませぬ。古の闇を語り闇を造り闇を落とす者が何故、正しくあれ、健全であれ、近代人たれと、斯様に微温い台詞を呪文に織り交ぜるのです。貴方はそうして世の中と折り合いをつけようとしているのではないのですか。それならばそれは、大いなる欺瞞ではありませんか」

一瞬風が止む。ふわりと花びらが落下する。

漆黒の男の、死神のような風貌が浮かび上がる。

男は云った。

「それは少しばかり違っています。僕は祓うの呪うのを仕事にしている訳ですからね。仮令不本意であろうとも、己の主義主張に反していようとも、将まつた矛盾があろうとも、一切関係ない。その場その時一番相手に利く呪文を誦えるだけです。近代反近代人道非人道の区別など——僕には最初からない」

女は返す。

「詭弁です。貴方はそうして越境者の振りをするけれど、それは戸惑いではございませんか。貴方の場合、稀に顔を出す人間性は古の理に根差した闇を近代主義の不毛に照らすことにしか機能しません。鬼も蛇も神も仏も居場所をなくし——立ち枯れてただ死ぬだけですわ。貴方の迷いは人を破滅させる。貴方とて——人を殺している。同じことです」

「残念ですがそれも外れていきます——」

男はひとつも動じない。

「僕は近代と前近代と云った範疇で歴史を捉えることはしません。僕にとっては近代だろうが古代だろうが過去は過去。行末を除き、現在を含む来方の凡ては同列です。そして近代主義だろうが反近代主義だろうが、凡ての言説は呪文以上のものにはなり得ない。僕の言葉が人道的に聞こえるならば、それは聞く者がそうした毒に侵されているからです。僕はそんな主義主張は持っていない。僕の言葉に綻びがあったのなら、それもまた計算のうちなのです」

「しかし貴方は——」

あの女を死に追いやった——と女は珍しく激昂する。それは不本意だったのではないのですか——と男を追及する。そうした言葉が男を揺さぶることになるのだと、女は何故か信じている。男は答える。

「慥かに不本意です。遣り切れない。しかしそれは決まっていたことだ。僕が関わることで確実に破滅が訪れる——それは予め解っていたことです。だからこそ僕は——己の行為を無効化する事故を常に夢想する。しかしそんなことは——起こらない」

「決まっていた——こと？」

それはあなたも承知の筈でしょう——と、男は静かに女を挑発する。女は僅かに混乱して、冷たい墓石に手をかける。そして云う。

「貴方が関わることで自体が系を乱してしまったのです。貴方は傍観者を決め込んでいるけれども、観測行為そのものが不確定性を内包していることは御承知でしょう。それならば——予測など」

旋風に地を覆う花びらが吹き上がり舞う。

その渦に言葉に乗せて、男は饒舌になる。

「慥かに、観測者が無自覚である場合は不確定性の理から逃れられるものではありません。だが観測

者がそうした限界を十分に認識している限り、己の視点を常に括弧に入れて臨む限りはそのうちではない。僕は事件の傍観者たることを自覚している。つまり観察行為の限界を識っている。だから僕は言葉を使う。言葉で己の境界を区切っている。僕は僕が観察することまでを事件の総体として捉え言説に置き換えている。僕は既存の境界を逸脱しようと思っ

てはいない。脱領域化を意図している訳でもない」

「あ、貴方は——」

「僕の悲しみはそこにあるのです。あなたにそれはないのかと、ずっと思っていた。しかしどうやら、あなたはそれに無自覚だっただけのようだ——」

男は女に向き直る。

女は戦く。しかしたじろぐことはしない。

男は限取のある凶悪な眼で女を見据える。

「——これで漸く解りました。あなたはあなたが発動した計画がどのような理に則って動くのか、全く理解していなかったのですね——」

女は虚をつかれ、瞬時虚勢を張ることを忘れて、二歩三歩後退した。それは女にとって屈辱だった。男はその僅かな隙を捉えて威嚇する。

「——だからあなたは止められなかったんだ」
「と——める？」

くるくると桜が舞う。

「あなたは無秩序に行動する因子達に意図的な刺激を与えて、事件を産出する網状組織を再産出して、もう事件が成立する環境を造り上げた。個々の因子やその行動は計画自体には多くの作用を及ぼしたが計画の作動——事件は個々の因果的作用には反応せず、ただ事件自体を反復的に産出し続けて行った。あなたは無自覚のうちに、作動すること自体が体系を規定する計画を立案発動させていたのです——」

「それでは——私は」

「——この場合主体と客体、能動と受動と云う二元的に對を成す認識論的な図式は無効化する。無自覺な觀察者は事態を誤認するだけだ。觀察者は当事者の捉えた現実を客觀的に知り、軌道修正出来る立場にはもう居らず、知り得る情報が多ければ多い程、觀察はただ事実を隠蔽^{いんぺい}するだけの行為に墮す。作動してしまった計画はただ延延と事件の反復再生産を繰り返す。だから——そして、あなたの望みは叶った。しかしあなたは反面、多くのものを失った」

「失った——」

失った、失いました、何もかも——。

「——しかしそれは失ったのではなく」

落としたのです、祓^{はら}ったのですと女は云った。

女は首を振る。はらりはらりと芳葩^{ほうは}が落ちる。

「——貴方がするように、私は」

「では何故に乱れるのです——」

男は強く云った。

「あなたは——本当に悲しんでいた訳だ。肉親を、友人を殺し、見ず知らずの者を巻き込み乍^なら——」

「悲しんで——いましたとも」

女は眞実^{ほんとう}に悲しかったのだ。

いくつも嘘は吐いたけれども、

常に気持ちには正直だったのだから。

男は黒い羽織を脱いだ。花びらが幾枚も散った。

論^{ろん}すような、諦^{あきら}めたような口調で男は云う。

「そんなにまでして手に入れた場所に——それでもあなたは甘んじて行くのですか。そしてまだこの先も、それを続けて行くおつもりなのですか。正直云って、僕はあなたが悲しもうと苦しもうと、どうでもいいのです。あなたは強い。そして聡明だ。寧ろ喝采を送りたい程です。ただ——その仕掛け^{システム}の中にあなたと云う個は居ないんだ。だからこのままでは——あなたは潰れる」

男は言葉を止めた。

女は墓を見ている。

女は云い訳を思いつく。

「この——墓に眠っている死人^{しびと}達が帳尻を合わせろと云っているのですか。聞けば貴方はどこやらで、自分は死人の使いだ——と仰ったとか」

「そんなのは詭弁——です」

男は笑った。

女も笑った。

「そうですね。御忠告に——従いましょう」

そして漸く運動は停止し、同時に境界は消えた。

「——私は今回のお話を——辞退致します」

男の視線が憂いを帯びる。

「後悔は——しないのですか」

「致しません」

そうですか——男は云った。

「ただ——このままここで石長比売^{いわながひめ}となり、生涯墓を守って生きるなど、あなたには似合いませんよ」
そんなことは致しません、と女は云う。そして、

「そんな優しいことを仰るから——」

貴方は誤解されるのですよ——女はそう続けたつ

もりだったのだが、語尾は春の突風に乘って薄れ、男は聴き取れぬままに察して頷いた。

そして女は新たな桜色の衣を纏う。

そして云った。

「高く——買ってくださいまし。私のために」

男はもう一度頷く。しかしその表情はもう女には見えていない。満開の桜の下、朽ち果てた墓石の前で、女の視野はただ舞う花びらを捉えている、

「私はもう一生泣きませぬ。泣いては己が立ち行かぬ。こうなった以上はもう一度己の居場所を探します。負けません。負けてなるものです。貴方よりも誰よりも、強く生きてみせましょう。石長比売の裔^{すえ}として、私は悲しくとも辛くとも笑っていないければならぬのでしよう。それが——」

女は、静かに、毅然として云った。

「それが——^{じょうろうぐも、こんわり}絡新婦の理ですもの」